歴史探求・上関城主三潴氏の謎を追って

2015 年 12 月　渡辺伸栄

我が集落の古城上関城の城主の謎を追って 7 年になる。この間 3 度ほど、途中経過発表の機会を得た。1度目は 2009 年、三潴氏の謎の概要をせきかわ歴史とみちの館（歴史館）の会報紙で、2 度目は 2013 年、三潴氏四百年の事績を関川学研究会で、3 度目も翌年 2014 年の同研究会で、上杉景勝による三潴氏所領没収の新事実を紙面で発表した。そして、この度また謎が一つ解明され、併せて大きな問題が提起されたので紹介させていただきたい。

三潴系図のうち飛騨守について

歴史館の常設展示室に三潴氏系図がある（後掲）。その中で、飛騨守と左近助の二人は、「関川村史」にも、その元となった横山貞裕氏の「三潴氏の活動について」（上関城発掘報告書に所載）にも登場していない。それ以外の図書・資料でも、私は今まで目にすることはできなかった。ところが昨年 4 月、私の HP「上関城四百年物語」を見た奥山荘郷土研究会の高橋範行氏から、ご自分の研究論文に三潴飛騨を取り上げたとの連絡があり、その論文が掲載された会誌「おくやまのしょう」第 39 号をご恵贈いただいた。

高橋氏の論文は「平子朝政・斎藤珠泉連署書状の登場人物」と題され、その書状に登場する 16 人の人物について考察を究めたもので、その中の一人に三潴飛騨がいた。ただ高橋氏は三潴飛騨については年齢を検討しただけで詳しくは言及してなく、むしろ飛騨以前の三潴氏について横山貞裕氏の説を批判的に検討している。それは歴史館の系図を書替えなければならないほどの重大な指摘なのだが、それは後に回して、まずは高橋氏のご教示に基づき、当該連署書状（新潟県史資料編）と中条越前守藤資伝（中条町史）を読んで、三潴飛騨守について判明したことを述べる。

胎内川の戦いに三潴飛騨守登場

15 世紀末のこと、現在の村上にいた本庄氏は越後守護上杉氏に反乱を起こした。守護方は平子と斎藤を大将に討伐軍を胎内川原へ進めた。このとき加地二郎右衛門と共に上杉軍を迎えに出た人物として三潴飛騨が登場している。なお、胎内川原の戦いの年は必ずしも定説化していないようだが、高橋氏は明応 7（1498）年と考察している。

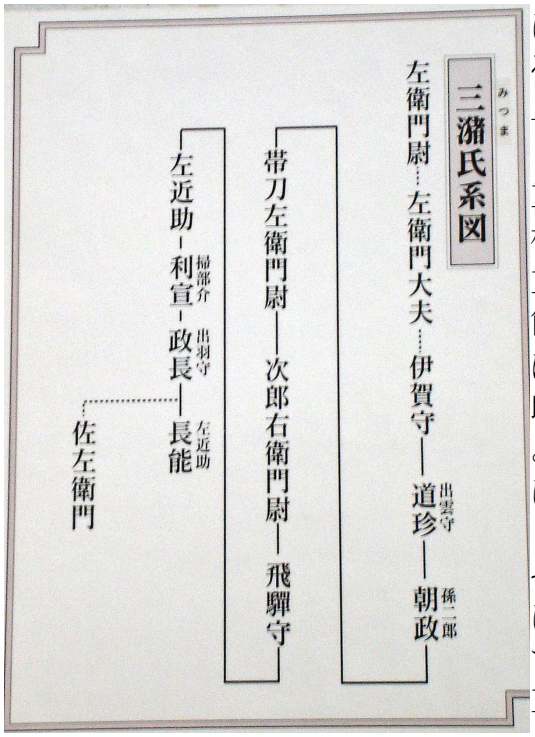
中条氏と黒川氏は共に上杉軍に従軍していたが、両氏には領地争いがあり黒川氏は守護の裁定に不満を持っていた。そのため裏切りの噂があって軍を黒川の地内へ進めることには不安の声が出ていた。その状況の中で、地元の加地・三潴両氏は然るべく陣場をとるよう案内をしたもののようである。

中条氏は裏切りを警戒していたのだが、本庄軍が荒川を越え南下との報で上杉軍は胎内川を渡る。そこへ危惧した通り黒川氏の裏切りが起こり、中条氏の当主は七歳の藤資であったが、後見の祖父朝資が戦死という大痛手を蒙ったのであった。

三潴飛騨守が登場するのはこの一度だけだが、地元の守護代官として上杉軍の案内役を果たしたものと考えられる。なお、中条と黒川の領地争いには、関郷の落合（上関と下関の間）も含まれていて、三潴飛騨守の登場と合わせて胎内川合戦に我が郷土も深く関わっていたことになる。

三潴系図のうち孫二郎朝政について

高橋氏の論究の中心は、出雲守道珍から飛騨守までの関係を検討したことにある。それによれば、孫二郎朝政は三潴氏ではなく平子氏だということになる。歴史館の系図の正否に関わる大きな問題提起と受け止め、検証する必要があると考えた。



＜歴史館に掲示の系図＞

問題の核心は、典拠となった享徳3（1454）年の平子政重の書状2通をどう読むかにある。書状は、黒川氏実が根岸の地を回復すべく運動する中で、守護方の役人政重から氏実宛に出されたものである。関係箇所だけを極簡略に紹介すると、1通目は「三潴道珍が言うには伊賀は脚気だし、そのほか事情で出て行けない、所帯は孫二郎に渡すのでその初仕事にしたい」。2通目は「根岸のことは三潴によく言っておいた、伊賀方所帯を愚息孫二郎に渡す」とある。

横山貞裕氏は前掲書で、伊賀守が父、出雲守道珍がその子で兄、孫二郎が弟という関係で読んだ。同じ書状について、横山氏より古く斎藤秀平氏は著書「新潟県史」で、三潴総（孫の誤植か）次郎が就職後改名して三潴弾正になったとしている。

弾正とは、同年に三潴道珍が出した2通の書状に出てくる人物で、1通は黒川氏実に宛て「根岸の地は三潴弾正が知行している」。2通目は三潴弾正宛に「根岸の地を黒川に渡すよう」指示している。このことから、三潴弾正という人物がいたことは確かだ。横山氏は斎藤氏の説に依ったのだろうか、弟の方を孫二郎弾正だとしている。

高橋氏の指摘を受け政重の書状2通をよく検討すると、2通目の愚息孫二郎に引っかかる。他人の子を愚息と書くはずがないから、平子政重が自分の子を指したものと読める。横山氏が2通目の「愚息」をどう読んだかは分からない。もしかすると孫二郎が二人いて、1通めのは三潴道珍の弟・孫二郎弾正のことだが、2通めの愚息は平子政重の子孫二郎朝政のことと読んだのかもしれない。

ここまでの検証では、系図の孫二郎朝政を孫二郎弾正に訂正すれば済むことになる。がしかし、問題はそう簡単ではない。

三潴孫二郎弾正は存在したか

高橋氏は、政重の書状一通めの孫二郎も平子朝政のことだとしている。道珍が言ったのは、「父の脚気で出られない」ということだけで、その後の「所帯を孫二郎に譲る」は政重の言だと読む。

考えてみれば、同一人物が同一日に出した2通の書状に登場する孫二郎が、二人別の人物だと読む方が不自然である。2通とも「所帯を孫二郎に渡す」と同じ内容を書いているのだから、これは同一人物と読むのが自然だ。とすれば、三潴弾正という人物は存在しても三潴孫二郎という人物は存在しなかったことになる。

そこで改めて当該の史料に当ると、県発行「県史資料編」でも「中条町史」でも、平子政重の書状2通とも孫二郎の箇所には注釈の添書きがあり、平子朝政と明記してあった。斎藤氏や横山氏が基にされた越佐史料や奥山庄史料集には、そのような注釈は記されてない。横山氏の後の時代になって、二通の孫二郎は平子朝政であると断定され添書きが入れられたのだろう。

三潴氏には、孫二郎弾正も孫二郎朝政も存在しないことが明らかになった。

「関川村史」の混乱

それでは、歴史館の系図が孫二郎朝政となっているのはなぜか。横山氏の説に拠ったとしても、孫二郎弾正になっていなければならないはずだ。

混乱の原因は、「関川村史」にあった。既に述べたように、根岸の地に関わる道珍の書状の相手は三潴弾正なのだが、それを村史は孫二郎朝政と記している（188 頁）。その頁の前段に平子政重の 1 通目の書状を引用解説した中で、「孫二郎（朝政）」と記していることからすると、「県史資料編」の史料の添書き、つまり孫二郎は平子朝政だとした注釈の「平子」を読み落としたものと思われる。村史が元にした横山氏は、孫二郎は三潴氏だとしており、それが先入観念となっていて、孫二郎＝三潴氏＝朝政としてしまったのではないだろうか。

羽継原合戦で戦死したのは誰か

さて、長禄 3（1459）年の羽継原合戦の翌年将軍義政から三潴帯刀左衛門尉に父戦死の感状が出ている。その父の名は不明だが、「上関城四百年物語」で、私は、戦死したのは三潴弾正孫二郎朝政としてきた。横山氏の説と「村史」の説を合体させたのであったが、それは誤りと分かった。では、本当は誰だったのか。

系図には一切出ていないが、道珍の次に弾正がいたのは確かだ。ここまでの検証の通り孫二郎は平子氏だから、系図の孫二郎朝政の箇所には三潴弾正が入ることになる。よって、戦死したのはこの人物ということになる。

しかし、高橋氏は別な説を立てる。出雲入道道珍の子が弾正帯刀左衛門尉、その子が飛騨次郎右衛門尉とし、羽継原で戦死したのは道珍だとする。つまり、弾正と帯刀は同一人物、次郎右と飛騨も同一人物だとする。4 代が 2 代に縮まるわけで、それにより高橋氏の計算では胎内川合戦当時の飛騨守の年齢は 31 歳以上となるという。大事な合戦場面で上杉軍を出迎え案内するに相応しい年齢であることになる。

道珍と孫二郎を兄弟としたのは横山氏である。二郎に着目したことと、道珍と弾正と帯刀の三者の間が短すぎることもその理由だったのではないだろうか。弾正と帯刀が同一人物であれば、その問題も解消できる。それに、道珍の書状から飛騨守登場まで 44 年、伊賀守は引退していたとしても、その間に当主 5 人は多すぎる。そう考えれば、高橋氏の説が妥当のように思えてくるのだが、現段階では確証も傍証もなく保留としておくほかはない。

余談ながら、先月、上関城初代城主三潴左衛門尉の故地とされる筑後国三潴荘（現福岡県久留米市三潴町）の地に立ってみた。今はもう縁を偲ぶ術もなく、謎解きはまだまだ続く。